
冬が嫌いな氷魔術師

カフェイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬が嫌いな氷魔術師

【NZコード】

N8129Z

【作者名】

カフェイン

【あらすじ】

特異な系統が氷であるのに冬が嫌いというなんかずれた少年、氷村正人。

そのギャグみたいな人柄とは裏腹に重い過去を背負っている彼は、紅魔法学校でどのようにすごしていくのか。魔法が使える世界での

学園ストーリー

プロローグ スペテノハジマリ

「はあ、はあ、はあ・・・・・」
自分の声も聞こえなくなるような豪雨の夜、少年は逃げていた。
幸いにも、この豪雨のおかげで足音も声もかき消されている。
決してあてがあつて走っているわけではなかつた。

-死にたくない -

その願いだけが少年の体を動かしていた。

いつたいどれほど時間の時間を走り続けたのだろうか。

一時間、一分、一秒

迫りくる恐怖により時間の感覚さえ分からなくなつてきていた。
どうしてこんなことになつてしまつたのだろうか。
つい数十分前までは、大好きな家族とともにいつもと変わらず過ごしていた。

父と、母と、幸せな時間を過ごしていたのだ。

あの黒服の奴らが来るまでは。

突然、家の玄関が物凄い音を立て、吹っ飛んだ。

父はこのあたりでは一番の魔術師であり、国直轄の魔法防衛軍の小隊長だったので

一直線に玄関へ飛び出していった。

母は急いで少年をかづきあげ一階の部屋に逃げ込んだ。
9歳の少年にはいつたい何がおこったのかわからなく、
母に聞いても「私達がぜつたいに守るから、大丈夫よ」としか言わ
ない。

母がそういうなら大丈夫というなら大丈夫なのだろうと納得しよう
としたとき、

「我らはロミスオンド！」

その声を聞いたときの母の顔は頭から離れない。
恐怖と絶望が入り混じったような顔をしていた。

それを聞いた後の母は少年に話すひまさえ『えないと素早くを自
らの血で

魔法陣を書き、何らかの呪文を唱えはじめる。

すると、少年の足元にも同じ模様の魔法陣が現れ激しい光を放つ。

「いつたい何がおこつてるの！？」

ついに耐え切れず少年は母に問いかけた。

少し寂しそうな表情をしたが、すぐに微笑み

「これからあなたはつらい人生をいくことになるかもしれない。そ
れでも、決して
下を向かず歩き続けなさい。」

と言い、自分のつけていた十字架のついたネックレスを少年に渡し
た。

その時、部屋の扉が黒服の男たちによつて破られた。

「じゃあね、必ず逃げて生き延びなさい」

それが最後に聞いた母の言葉だった。

あの黒服の男たちはいったいなんだ

・ロリスオン・ってなんだ

そんなことを思いながら視界は真っ白に染められていった。

「エリは、外なのか」

さっきの魔法陣は移転魔法のものだつたらしく、家の近くの公園に移転されていた。

しばらくの間呆然としていたが、すぐに走り出した。

母の言葉を思い出したからである。

少年の予想通りに遠くから「早くあのガキを捕まえろ」という声が聞こえてくる。

少年はひたすら逃げた。どこへ、わからない。ただひたすら遠くへ。いつたいこの先どうすればいいのか、わからない。何もわからない。

わかっていたのは逃げなければならない、それだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129z/>

冬が嫌いな氷魔術師

2011年12月25日22時52分発行